Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-10

哲学の社会的責任 ： 哲学対話＋地方創成教育の試み（【ワークショップ報告】メタ科学技術研究プロジェクト第6回 ： 平成29 年3 月9 日）

河野, 哲也

(Citation)
21世紀倫理創成研究,11:10-11

(Issue Date)
2018-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010215

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010215

KOBE UNIVERSITY

【ワークショップ報告 第6回】
平成29年3月9日（木）

哲学の社会的責任　哲学対話＋地方創成教育の試み

河野　哲也
立教大学文学部教授

1．哲学者の社会的責任

昨今、人文科学、教育学に関する不要論、これらの分野が何の役に立つかという議論がなされている。こうした議論に対して、本発表の前半では、哲学者の社会的責任が何かを明らかにした上で、日本学術会議における哲学分野の「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準」に関する議論を紹介する。

研究者の社会的責任に関する議論の発端となったのは、マンハッタン計画に関する科学者の責任の問題である。この後、科学者同士の相互批判の精神、個としての研究者が人間への道徳的責任をまっとうすべきであるということが重視されるようになった。では、人文学の研究者はどのような社会的責任をもつのか。一つの役割として、研究集団が時事問題について市民に対して発信するということが考えられる。こうしたアウトリーチが政治的に完全に中立であることは不可能だが、民主的な諸価値に則った問題解決を提案することは可能であり、重要だと考える。

2．日本学術会議「質保証のための参照規準」哲学分野

では、哲学のアウトリーチとは何か。ここで重要となるのは教養と哲学の関係である。哲学は様々な分野を横断する。そのため、哲学には、一般的で汎用性の高い思考と議論に関するスキルが存在する。このスキルが教養を学ぶためには重要であり、このことを河野は日本学術会議の「質保証のための参照基準」哲学分野の検討分科会で伝えた。哲学を学ぶことによって獲得すべき知的態度や構えは、民主主義社会への参加意識を醸成すべき市民にとっても必要な資質であり、徳目なのである。

3．哲学プラクティスと子どもの哲学の目指すもの

発表後半では、哲学プラクティスと子どもの哲学の実践を紹介する。哲学プラクティスは対話を基本的な方法とした実践哲学である。哲学対話とは、あるテーマ（問い）について対話を通して深く考え、参加者相互の理解を深めながら、自分の思考も深める過程である。意見や世界観が大きく異なる相手を他者として承認し、合理的な議論を行い、創造的な解決へ向けて努力できる力が求められ、養成される。

子どもの哲学が伸ばすのは、個人の能力としては思考力とケアする力、集団の能力としては集団での問題解決力、集団を形成し維持する力である。こうした能力が伸びるのは、哲学対話によって前提が問い直され、現在の行動のあり方、集団のあり方を、他にもありえた可能性の中の一つとして捉えることができるからであると考えられる。

4．地域創生教育としての子どもの哲学

こうした子どもの哲学を「地域創生教育」として実践する教育活動を河野は各地で行っている。この活動では､子どもたち自身が地域の価値と問題を見いだし、対話を通して、持続可能な地域としてあるべき姿と自分たちの未来の生活を議論する。このようにして、子どもたちが地域をデザインし、プロジェクトとして実行する。こうした実践の事例として岩手県立図書館や気仙沼図書館での活動が紹介される。

5．哲学プラクティスと哲学

哲学プラクティスを肯定的に評価する三つの立場が考えられる。すなわち、哲学プラクティスは哲学へのよき導入、応用と考える入り口論・応用論、そして、哲学プラクティスをアカデミックなパラダイムによる圧政的な知のあり方を民主化する営みと考える思考の民主化論、最後に、河野が提起するカーニバルの哲学である。この最後の立場では、哲学を、過程を重視し、思想の固定化を取り払い、アイデンティティをつねに取り壊し、流動的な生を生きるための思考の技法と考える。哲学プラクティスはこうしたカーニバルの哲学として評価することができる。

（丸山栄治　要約）